

Y1-3

インドネシア共和国ボゴール病院での 保健支援活動報告

富山赤十字病院 看護部

○碓井 綾

報告者は2008年10月から3ヶ月間、国際救援医療要員研修生としてインドネシア共和国ボゴール病院で活動する機会を得た。この活動は、ボゴール病院の医療機能の向上を目的とし、地域に対する保健医療サービスを拡充することを目指している。今回、報告者にとって初めての海外派遣であり、その活動および今後の課題を考察する。

ボゴール病院は、首都ジャカルタから南へ60km、人口約70万人のボゴール市に位置し、1931年設立の260床、医師33人、看護師320人の赤十字病院である。熱帯疾患や交通事故による外傷などが多い。日赤は2005年1月からこの事業を開始し、既派遣看護師は10人で、これまで手洗いの実施、手袋の装着、ごみの分別などが指導されている。

ボゴール病院では、看護師は器械の使い回しや血液や体液に直接触れて看護行為をしており、患者だけでなく、看護師の安全を守るためにも改善の余地があった。そこで最初に、外科病棟において感染予防を再認識してもらうことを目標とし、創処置の問題点を指摘した上で、清潔操作の見直しを行った。次に、術後創感染の調査を行い、感染創を持つ事例を挙げた。また、結核患者に対する対策がとられておらず、全病棟の感染対策の徹底を目指し、基準の見直しを行った。そして、看護師らの患者の安全安楽に関する意識も低く、褥瘡を持つ患者に対して体位変換がほとんど行われていなかったことから、体位変換を習慣化させるために負担感を与えない方法を示し、チェック表を作成し、活用した。

これらの結果、創処置の際に問題点を自ら改めようとする姿勢が看護師にみられたこと、体位変換の2時間おきの実施を習慣化できたことから看護師の意識と行動に変化が見られた。しかし、結核患者の管理については活動期間が短く、十分な評価をするに至らなかった。

Y1-4

ジンバブエ・コレラ救援活動 ～技術要員の活動～

名古屋第二赤十字病院 医療技術部 第二臨床工学課¹⁾、

管理局 経理部 施設課²⁾、国際医療救援部³⁾

○新居 優貴¹⁾、山田 悌士¹⁾、浅井 由樹夫²⁾、

白子 順子³⁾、伊藤 明子³⁾

日本赤十字社（日赤）のジンバブエにおけるコレラ救援事業に対し、技術要員として活動したので報告する。技術要員の活動として、居住区およびコレラ治療センター（CTC）の電気設備の設置・管理、CTCの浄水装置・経口補水塩（ORS）用の水質の管理、IT機器管理、現地スタッフに機材の取り扱い指導などを行った。日赤が支援していたCTCにはピーク時に16名の患者を収容しており、脱水症状、消毒、清掃等に対応するために大量の水が求められたが、水道水のみでは無消毒や不純物混入による水質不良や断水のため、水分補給用の水として使用するのには困難であった。そのため、ダムの水や雨水を浄化して、ORSや手洗いの水として使用した。水質はWHOのコレラ・コントロール基準に従い、残留塩素濃度を0.5mg/Lで管理し、一週間に2、3回、一回あたり約1000～1500Lの浄水を行った。定期的な機材の使用状況の確認やトラブルの早期対応が困難であったため、早期から現地スタッフに機材の使用法・トラブルシューティング等の技術支援に取り組んだ。日赤の浄水装置はコレラ救援のように大量の浄水を行う救援活動を想定したものでなかったため、沈澱パウダーの不足からフィルターが詰まり、浄水できなくなるといった問題が生じた。コレラ救援活動において水の確保は非常に重要であり、水質管理や浄水設備の状態把握には特に配慮を要した。現場で初めて使用するため、さまざまなトラブルを経験したが、当施設で行っている技術要員専門研修で得た知識、技術を応用することで対応可能であり、受講の有用性を確認できた。